

故郷の思いを紡ぐ玩具 ドイツ・エルツ山地

2018年11月24日 朝日カルチャーセンター立川 岡部由紀子

<一昔前のおもちゃ職人の暮らし>

- 19世紀後半 おもちゃ職人の収入が激減（海外市場の縮小、玩具取次業者の搾取、木材価格の値上がり）
1875年～81年 工賃がおおよそ60%以上下がる。
1881年 フランスの関税方式の変更（価格の10%から重さ100kgにつき60fr. ≒17万円）

→ ザイフェンでは木工玩具のミニチュア化などで難局に立ち向かったが、大半のおもちゃ職人は窮乏を極めた。貧しい家庭は、週一回、役所から貧民救済費 1.50 マルクと婦人会からパン1個の支給を受けた。森の恵み（薪拾い、野生のベリー摘み、きのこ採集）は、わずかながら家計の足しとなった。

木工玩具の価格（ザイフェン「エルツ玩具博物館」の展示より）

1898年	ミニチュア人形	60体	0.30 Mark	
1906年	ミニチュア馬車	12台	0.50 Mark	
1914年	ミニチュア動物	60匹	0.30 Mark	（彩色前 0.05 Mark）

二十世紀初頭のおよその物価

	牛乳1リットル	パン1キロ	小型パン	ビール1リットル	厚生食堂のランチ
1900年	0.19 Mark	0.46 Mark			
1913年	0.25 Mark	0.46 Mark	0.03 Mark	0.24 Mark	0.50 Mark

<ドレスデンの民俗学者とエルツ山地の玩具職人>

19世紀末、職人の手仕事が工場製品にとって変わられていくことへの危機感から、郷土に伝わる伝統技術を記録・保存しようとする気運がドイツ各地で高まる。エルツ山地があるザクセン王国でも、ドレスデンにある「王立美術工芸学校」教授のオスカー・ザイフェルト Oskar Seyffert（1862-1940）が、庶民の暮らしから生まれた民俗資料の収集に精魂を傾けた。彼は1913年、ドレスデンに「ザクセン民藝博物館」 Das Landesmuseum für Sächsische Volkskunst を開館し、ザクセン各地から集められた伝統文化と民衆芸術の貴重な記録が今に伝えられている。



コレクションには、エルツ山地で出会った素朴な木彫りの人形 Männel も加えられ、生活苦にあえいでいたおもちゃ職人の大きな励みとなった。ザイフェルトは1852年にザイフェンに設立された「おもちゃ専門学校」に、「美術工芸学校」出身のアルビン・ザイフェルト Alwin Seifert とマックス・シャンツ Max Schanz を送り込んだ。彼らは優秀な指導者として青少年の教育にあたる一方、積極的に地元の玩具職人を訪ねて助言を与え、廃れていた伝統技術を復活させながら時代に即したデザインを考え、エルツ山地の玩具作りに多大な貢献をした。

← 窓辺に座るザイフェルト、後方の建物が「ザクセン民藝博物館」

<伝説的な人形作り職人 Männelmacher>



アウグステ・ミュラー



カール・ミュラー



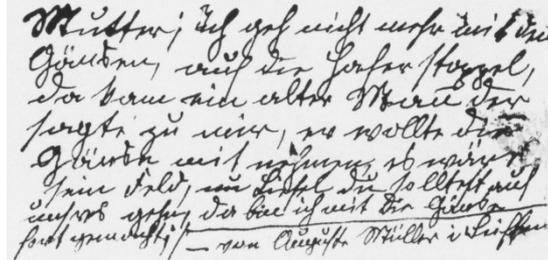
カール・ミュラーの代表作 * 絵:ハンス・ライヒェルト

アウグステ・ミュラー Auguste Müller (1847-1930)

ザイフェンの貧しい人形作りの家に生まれ、幼少時から三人の兄と共に家業を手伝った。独立してからは、旧鉱山局の建物の一室で、チェスの人形を彫るなどの人形作りの下仕事をして細々と生計を立てた。極貧の生活の中、暖房用の薪から小刀で村人の姿を彫るのが楽しみだった。できあがった人形は一人暮らしの部屋を賑やかに飾り、しばしばモデルとなった村人にプレゼントされた。人形の台座の裏には、モチーフに関する短文が書かれた紙が貼ってあり、彼女が物語を紡ぎながら人形に命を吹き込んでいったことが見てとれる。



ガチョウ追いのリーゼル



四角い台座の裏に張られた紙

お母さん、もうガチョウを追って Haferstoppel には行かないわ。おじいさんがやって来て、ここは俺の畑地だから、ガチョウを連れて行くぞと言ったのよ。リーゼル、うちの畑に行けばよかったのに。そこで、私はもう一度ガチョウと出かけたの。ザイフェンのアウグステ・ミュラー作

紙に書かれた短文の翻訳 (Okabe)

好奇心旺盛なアウグステは、村を訪れる都会の人々の姿も人形にして、ときおりは観光客に売った。10cmに満たない素朴でユーモラスなミニチュア人形は、オスカー・ザイフェルトの目にとまり、彼はしばしば彼女の薄暗い小部屋を訪れ、窓際の仕事机兼食卓から生まれる人形を博物館のコレクションにと所望した。彼女の仕事は晩年になってようやく認められたが、現在ではエルツ山地のフォークアートの中でもっとも貴重な品のひとつと評価されている。

カール・ミュラー Karl Müller (1879-1958)

アウグステ・ミュラーの甥。古くからエルツ山地に伝わる精神や仕事ぶりを踏襲した最後の人形作りといわれる。カールの父はアウグステの12才年上の兄で、「おもちゃ専門学校」の絵の教師に推挙されたが、家業を継いで人形作りとなった。カールが13才の時、父は「足踏みロクロを踏んでくれ」と言い残して世を去る。16才で職業学校を卒業しガラス絵職人になるが、ガラス絵が斜陽となり人形作りとなった。信用金庫の屋根裏にある二間の住居で妻と人形作りに励み、ロクロ仕事は地下室で行った。村に電気が引かれても、父の足踏みロクロで人形の原型を挽き続けた。

彼の素朴で暖かみのある生き生きとした人形たちは高い評価を受けた。1920年代、オスカー・ザイフェルトの推薦でザクセン民俗文化保存協会に定期的に人形を納めるようになり生活が安定したが、1930年代に入ると注文に追われる生活が始まった。クリスマスの居間を飾る「ピラミッド」と呼ばれる燭台に載せる人形は彼の代表作となる。向かいに住むブルーノ・ヘニッヒは、四種類の大きさの「ピラミッド」を組み立ててカールに渡し、カールは1.5 - 14cmの大きさの人形を作った（大半は4 - 8cmの大きさ）。キリスト生誕の場面やエジプトへの逃亡、天使、鋤夫のパレード、羊の群れと羊飼い、森の情景などのモチーフが選ばれた。

第二次世界大戦後の東独時代は民衆芸術の担い手として奨励金を支給され、国営工場KWO(オルベルンハウ美術工芸社)で製作された「ピラミッド」にも、彼の人形を手本としたデザインが採用されている。現在でも、カール・ミュラーの人形を原点として仕事をしている玩具職人は少なくないと感じている。

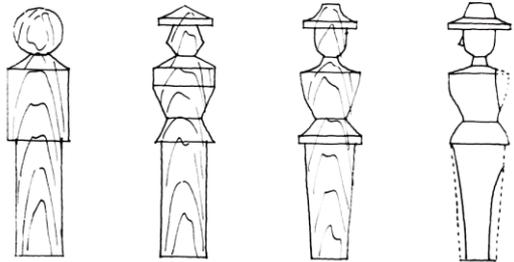


カール・ミュラーの人形が乗っているブルーノ・ヘニッヒ工場の「ピラミッド」*

アウグステとカールの人形の共通点と相違点



アウグステ・ミュラーは、ロクロを使わなかった。*



カール・ミュラーは、ロクロで人形の原型を挽いてから彫った。



アウグステ・ミュラー 郵便夫 都会から来た人々*



カール・ミュラー 森で仕事をする人々*

* は “Manfred Bachmann “Holzspielzeug aus Erzgebirge “1994 の挿絵 ハンス・ライヒェルト Hans Reichelt 画

気の向くまま、オリジナル人形をひとつずつ作ったアウグステ・ミュラー。時代の好みを反映した注文に応じて、さまざまなモチーフを多数作ったカール・ミュラー。伯母と甥の作風は似通っているようにも思えるが？

聖書の中の逸話や村人の暮らしは二人に共通するモチーフ。
それぞれ独自のモチーフは？

材料の違い

技法の違い

形の違い

＜引き継がれていく人形作り＞

ヴァルター・ヴェルナー Walter Werner (1931-2008)

1944年のクリスマスプレゼントに、カール・ミュラーの人形「薪拾いの男」をもらい、「こんな人形を作ってみたい」と人形作りの修行を始めた。伝統的玩具作りの技術を守り、この地に生きた人々の姿を後世に伝えることを使命とし、ミニチュア人形の制作に精魂を傾けた。



ヴァルター・ヴェルナーと
鋤夫人形

カール・ミュラー作
「薪拾いの男」

ルドルフ・エンダー Rudolf Ender (1898 - 1986)

村人の人形や動く玩具など、伝統技法の伝承に大きな貢献をした。

クラウス・ヒュプッシュ Klaus Hübsch

カール・ミュラーのキリスト生誕の場面や村人の人形のデザインを踏襲して簡素化した人形を製作している。

ギュンター・ライクセンリンク Günter Leichsenring (1931 -)

一昔前のクリスマス礼拝にでかける人々の情景や村人の姿を、マットな色彩と丁寧な仕事で作っている。

ギュンター・ライヒェル Günter Reichel

カール・ミュラーの村の楽隊や村人のモチーフを、愛嬌のある人形で表現している。



ルドルフ・エンダー **
ベリー摘み 薪拾い きのこ狩り



クラウス・ヒュプッシュ
薪拾いの男女



ライクセンリンク
ボビンレース編み



ギュンター・ライヒェル **
1699年に見本市に出かける玩具職人

** の人形は、木工玩具専門店「エルツ」所蔵